

三溪園に入り最初に目に飛び込んでくるのは鶴翔閣の大きく、重厚感あふれる茅葺屋根である。建物全体を見渡せる庭に廻込むと、細い柱・細い窓の棧・薄い杉板で張り込んだ屋根と、その上に位置する茅葺屋根の絶妙なバランスの良を感じることが出来る。

細く軽やかな下部と、どっしりとした上部屋根の間にある細い柱と漆喰の白い壁がまた旨くバランス取っているようだ。そのような鶴翔閣を木陰から見るのも格別である。

三溪園で最初に入った白雲邸。縁側に座り庭を通して見る三重塔の屋根。まさに室内・縁側(あいまいな空間)・庭(庭を通しての借景)のバランスのよさに見とれる。座した位置から視線を室内に向けると、繊細な造りの建具・色々な形状の天井の細い棧・網代天井・書院の薄い棚など書院造りならではの空間構成。

細い棧の障子から入る光により、明るい場所と暗い場所その間のあいまいな明るさの空間など光のバランスも面白い。

三溪園をさらに奥に進むと楼閣建築の聴秋閣が見えてくる。ここが横浜の中心であることを忘れさせ、京都の山中にいるような錯覚に陥らされる。建物脇を流れる小川のせせらぎと紅葉を内部から眺める為の工夫がある。入り口の板目市松模様・変形畳・全ての障子を明け放ったときの自然の飛び込み方、なんとも大胆な空間である。

